

蒙古事

弘安二年八月六日 五八歳

御文ふみはいそぎ御返事申すべく候ひつれども、たしかなる便宜びんぎ候はで、いまゝで申し候はず。べん弁あざりがびんぎ、あまり早そう早そうにてかきあへず候ひき。さては各々としのころいかんがとをぼしつるもうこの事、すでにちかづきて候か。我が国のほろびん事はあさましけれども、これだにも虚そら事になるならば、日本国の人々いよいよ法華経を謗じて万人無間地獄に墮つべし。かれだにも強つよるならば国はほろぶとも謗法はうすくなりなん。譬へば灸治やいとをしてやまいをいやし、針治はりたてにて人をなをすがごとし。当時はなげくとも後は悦びなり。日蓮は法華経の御使ひ、日本国の人々はだいぞく大族王の一閻浮提の仏法を失ひしがごとし。蒙古国は雪山せつせんの下王げおうのごとし。天の御使ひとして法華経の行者を怨あだむ人々を罰せらるゝか。又、現身かいげに改悔ををこしてあるならば、阿闍世王あじゃせおうの仏に歸してびゃくらい白癩治をやめ、四十年のいのち寿をのべ、無根の信と申す位にのぼりて現身得に無生忍をえたりしがごとし。恐々謹言。

八月六日

日 蓮 花 押